

過疎地域の農業や高齢者に関する都市在住者と地域在住者の心象の違い The difference in the image of the city dweller about the agriculture and elderly people of a depopulated area, and a local citizen

下平 佳江 Yoshie SHIMODAIRA, 加藤 麻樹 Macky KATO

Abstract: The method of getting food is different in urban and rural areas. In urban area, the method is limited although rural areas are close to a locality. Requests for food differ between them. The price is important for both of them. In addition, freshness, an expiration date, a security, convenience, etc. are required. Many of those who live in rural areas are related to an agricultural, or their respect is high. Since a familiar household is concerned with an agricultural in many cases; they experienced agricultural, or they work for the company relevant to an agricultural.

In this study, the image to the agricultural, the depopulation, and the elderly was investigated to those who live in urban area, and those who live in rural areas. Those who live in urban area tend to have an impression "poor" and "severe" about depopulation. They tend to have an impression of a "passive" and "plainness" about an elderly and an agricultural. Those who live in rural areas tend to have an impression "favorable" and "beautiful." The depopulation and the elderly are familiar for those who live in rural areas. The image will become good if the exchange with farmhouses increase.

Key words: image, depopulation area, agricultural experience, young people, elderly

1. 背景

昭和30年代の高度経済成長期から労働力を都市へ提供してきた農村は、その後の機械化や農業の使用などにより農業生産力の低下を少しでも抑える努力をしてきたが、農業従事者の高齢化や激減は、機械の使用が困難な中山間地域の農地を荒廃化させ、農業では生活が維持できないと考えた人々の流出によってさらに過疎化が広がった。

現在も広がりつつある荒廃地を毎日見ながら農業を営んでいる中山間地域の高齢者らは、自分のあとは農地が短期間で消滅してしまうことを予測している。すでに農業は世襲制では継続困難になりつつあるが、土地を手放すことには慎重であるとともに、耕作条件の悪い傾斜地を求めようとする新規参入者はいないのが実情である¹⁾。その結果、高齢化の進む中山間地域ほど耕作放棄地が広がり、他への用途もないままに放置されている。過疎市町村では行政として新規就農者の確保に取り組んでいるが、傾斜

がきつく機械化困難な中山間地域では、農地の買い手を見つけることは困難である。

国内の慢性的労働力不足とともに、食料需要の増大や食生活の多様化がすすみ、国外から輸入される農産物の量は著しく増加傾向にある²⁾。しかも輸送距離と輸入量を掛けたフードマイレージ値によると、総量では日本が9002億t・kmで世界一大きく、二位の韓国(3171億t・km)や三位の米国(2919億t・km)の約3倍であり、日本の食糧供給システムは、国外に依存する割合が非常に高いことが分る³⁾。

しかし、近年多発している偽装表示や農業が混入した食品による健康被害など、食に関する事件は、消費者に「安全な食糧」への関心を高めることになった。輸入農産物への信頼性が低下してくると、国内の農産物への期待度は高まるが、わが国の食料自給率はカロリーベースで1960年には79%であったものが年々低下を続け、1998年度に40%に達したあとは横ばいで推移しており2007年度も40%である。

農林水産省が1999年に制定した食料・農業・農村基本法の中で、10年間で5%引き上げるのを政策目標に打ち出しているが⁴⁾、食料自給率を高めるのは容易でない事は確かである。

食料自給率向上のためには供給と消費の両面から対策が必要で、食べ残しや消費期限切れによる食品の廃棄を減らすとともに、国内生産量の増加を図らなければならない。農業振興策の一つである「援農」は、農業の未経験者が人手不足の農家を援助する過程で農業を覚え、その中からやがて新規に農業に参入する人も出てくるので、農業への関心を持つ人なら誰でも対象となることから、農業人口獲得のためには効果的と考えられている。

人々が農業への関心を持つようになるきっかけは様々だが、都市と地域とでは、おのずと生産現場である田畑やそこで作業する人々を目にする機会が異なる。さらに地域に住んでいる者にとっては、自身が農業体験をする機会も得やすくなる。大学生の場合でも親や祖父母・親戚などが農業に関わっていることも多く、農業体験を身近にできる環境にあると言える。農業体験の有無は農業への関心を持つことと無関係ではないが、農業への関心が就農へと直結するものでもない。また、都市と地域の在住者としては、農業や食糧に対する意識に差が生じることが考えられ、過去の農業体験などによっても、農村・過疎地域・高齢者へのイメージ形成にも影響を及ぼしていると考えられる。

2. 目的

本研究では、食料に関連する行為として、「食材の調達」や「食事」など日常的な行動に対して、どのような意識が作用しているのかを都市在住者と地域在住者とで比較するとともに、過去の農業体験が、農村・過疎地域・高齢者へのイメージを形成する上で影響を及ぼすものであるのかを検証することを目的とする。

また都市部の大学生と地域の大学生とで、農業や高齢者などへのイメージが異なる場合は、それが何によって形成されてきたのかを推察し、好ましくないイメージと好ましいイメージとを決定する要因について明らかにする。

3. 方法

被験者は、長野県内に研修会などで訪れた都市部の大学生と社会人(63名)と、地域大学として長野県短期大学生と社会人(48名)の、計111名である。質問紙を用いて、過去の農業体験や親族に農業関係者などの有無を調べるとともに、食事の頻度や食材の調達の際に重要と考えている事柄について訪ねた。また①農業、②過疎地域、③高齢者に対してSD法による評価を行って、それぞれのイメージを、「好きな-嫌いな」などの24項目の形容詞対について、5段階評価(1=全くあてはまらない、5=非常によくあてはまる)で測定した。調査結果を因子分析により解析し、評価因子を抽出した。そこから都市部と地方に住む学生との差や、過去の農業体験が農業、過疎地域、高齢者に対するイメージに影響を与えているかを分析した。調査期間は2008年7月~9月である。

4. 結果

4-1. 回答者の特性

調査対象とした都市部の大学は関東と愛知県が主であり、内訳は男性42名(学生36、社会人6)、女性21名(学生17、社会人4)で、合計63名(学生53、社会人10)、地域大学として長野県短期大学を選定し、その内訳は男性3名(学生3、社会人0)、女性45(学生44、社会人1)で合計48名(学生47、社会人1)、男女別の各平均年齢は表1に示すとおりである。

表1. 対象者の属性

	男性				女性				全体		
	学生	社会人	年齢	SD	学生	社会人	年齢	SD	計	年齢	SD
都市	36	6	24.1	6.9	17	4	24.7	6.0	63	24.3	6.6
長野	3	0	19.3	1.9	44	1	18.9	2.7	48	18.9	2.6
計	39	6	23.8	6.8	61	5	20.7	4.8	111	22.0	5.9

1) 農業体験の有無

都市部と長野県別に、これまでの農業体験の有無と、親の職業や親戚などに農業関連者の有無状況を表2に示す。都市部の農業体験者が42.9%であるのに対して長野県の体験者は81.3%で、親や祖父母が農業関連の仕事に就いている割合が高く、また

親戚などでも農業に関わっている者が多い。体験作業の内訳は田 25、畑 16、りんご 6、畜産 1（複数回答）である。都市部での体験者は親戚が農家であるかに依存し、作業の内訳は田 17、畑 11、果樹 2、花 1（複数回答）である。

表 2. 農業体験の有無

都市	人数	農業との関連			長野	人数	農業との関連		
		%	親	親戚			ない	%	親
農業体験者	27	1	15	9	農業体験者	39	12	14	13
	42.9	3.7	55.6	33.3		81.3	30.8	35.9	33.3
非体験者	36	1	9	26	非体験者	9	0	2	7
	57.1	2.8	25.0	72.2		18.8	0.0	22.2	77.8
計	63	2	24	35	計	48	12	16	20
	100	3.2	38.1	55.6		100	25.0	33.3	41.7

2) 食事の回数

朝食、昼食、夕食の3回の食事を摂る頻度は、昼食はどのグループでも高く、次いで夕食となったが、朝食はまちまちの結果となった。表3に朝食をとる頻度をグループごとに示すが、毎日食べるのは長野県が多く、都市部では朝食を毎日食べる人の割合が減り、時々食べる人の割合が増える。また朝食はまったく食べない人の割合も都市部に多い。

表 3. 朝食をとる頻度

都市	毎日	時々	非食	計	長野	毎日	時々	非食	計
男	25	10	7	42	男	1	2	0	3
%	59.5	23.8	16.7	100	%	33.3	66.7	0.0	100
女	11	8	2	21	女	38	6	1	45
%	52.4	38.1	9.5	100	%	84.4	13.3	2.2	100
計	36	18	9	63	計	39	8	1	48
%	57.1	28.6	14.3	100	%	81.3	16.7	2.1	100

3) 食材の調達で重要と考える事

食材の調達で重要と考えることは、表4、図1に示すとおり都市部全体では a.価格 68.3% e.鮮度 33.3% d.期限 22.2% g.調理 22.2% c.安全 20.6% であり、その中でも農業体験者について見ると、割合は若干異なるがほぼ同様の順位であることが分る。非体験者では、a.価格 42.9% e.鮮度 19.0% b.利便 c.安全とも 12.7%という順位である。

一方長野県全体では a.価格 43.8% c.安全 39.6% が多く、農業体験者について見ると c.安全 35.4% a.価格 33.3%が多くなり、非体験者では人数が少ない事もあるが a.価格 10.4%である他は極めて少ない。また、b.利便や g.調理が長野県では 0%となっている。

表 4. 食材の調達で重視すること（複数回答）

都市	a	b	c	d	e	f	g	h	長野	a	b	c	D	e	f	g	h
体験者	16	3	5	8	9	2	8	2	体験者	16	0	17	5	3	3	0	0
%	25.4	4.8	7.9	12.7	14.3	3.2	12.7	3.2	%	33.3	0.0	35.4	10.4	6.3	6.3	0.0	0.0
非体験	27	8	8	6	12	0	6	0	非体験	5	0	2	0	2	0	0	1
%	42.9	12.7	12.7	9.5	19.0	0.0	9.5	0	%	10.4	0.0	4.2	0.0	4.2	0.0	0.0	2.1
全体	43	11	13	14	21	2	14	0	全体	21	0	19	5	5	3	0	1
%	68.3	17.5	20.6	22.2	33.3	3.2	22.2	0	%	43.8	0.0	39.6	10.4	10.4	6.3	0.0	2

(a.価格、b.利便性、c.安全性、d.消味期限、e.鮮度、f.食品添加物、g.調理の手軽さ、h.他)

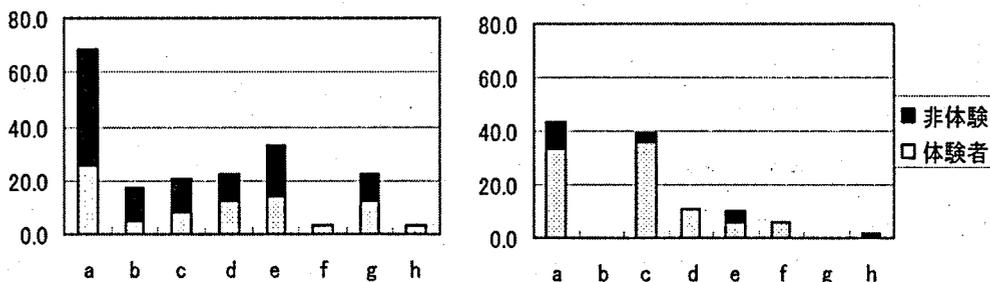


図 1. 食材の調達で重視すること（都市：左と長野：右）

4) 食事について重要と考えること

食事について重要と考えることは、表5、図2に示すとおり都市部全体ではb.栄養 52.4% a.健康 41.3% c.エネルギー 25.4% e.調理 23.8%であり、農業体験者について見ると、b.栄養 22.2% a.健康 20.6% e.調理 12.7%。c.エネルギー 11.1%とほぼ同様の順位であることが分る。非体験者では、b.栄養 30.2% a.健康 20.6% c.エネルギー 14.3% g.コスト 12.7%の順位でe.調理よりもg.コストが高くなる。

一方長野県全体ではa.健康 35.4% b.栄養 31.3% g.コスト 16.7%が多く、農業体験者について見るとa.健康 31.3% b.栄養 27.1%でg.コスト 16.7%と同順位である。非体験者ではc.エネルギー 6.3% a.健康 b.栄養 d.雰囲気ともに 4.2% であり e.調理 f.病気予防 g.コストに関しては 0%である。

4-2.農業、過疎地域、高齢者に対するイメージ

1) 農業に対するイメージ

24項目の形容詞対による農業に対するイメージでは、(単純な-複雑な)について都市(3.8)と長野(3.0)で差が見られた。また、農業体験者と非体験者とで差が見られた項目を図3に示す。

都市居住者の中では、農業体験者の方が農業を自由で良いというイメージを持ち、非体験者は大きく暖かいというイメージを持つ。また地方居住者では非体験者は遅く静かなイメージを持つが、体験者は自由であるがやや消極的で、好きでも嫌いでもないというイメージを持つ。

表5. 食事で重視すること (複数回答)

都市	a	b	c	d	e	f	g	h	長野	a	b	c	d	e	f	g	h
体験者	13	14	7	2	8	1	4	1	体験者	15	13	4	0	2	0	8	1
%	20.6	22.2	11.1	3.2	12.7	1.6	6.3	1.6	%	31.3	27.1	8.3	0.0	4.2	0.0	16.7	2.1
非体験	13	19	9	5	7	4	8	2	非体験	2	2	3	2	0	0	0	1
%	20.6	30.2	14.3	7.9	11.1	6.3	12.7	3.2	%	4.2	4.2	6.3	4.2	0.0	0.0	0.0	2.1
全体	26	33	16	7	15	5	12	0	全体	17	15	7	2	2	0	8	2
%	41.3	52.4	25.4	11.1	23.8	7.9	19.0	0	%	35.4	31.3	14.6	4.2	4.2	0.0	16.7	4

(a.健康、b.栄養バランス、c.エネルギー補給、d.雰囲気、e.調理を楽しむ、f.生活習慣病の予防、g.コスト、h.他)

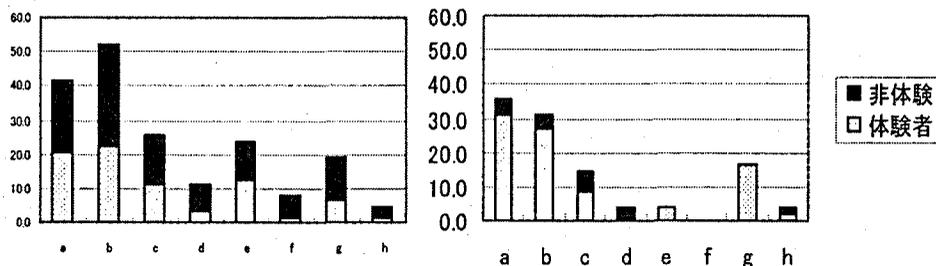


図2. 食事で重視すること (都市：左と長野：右)

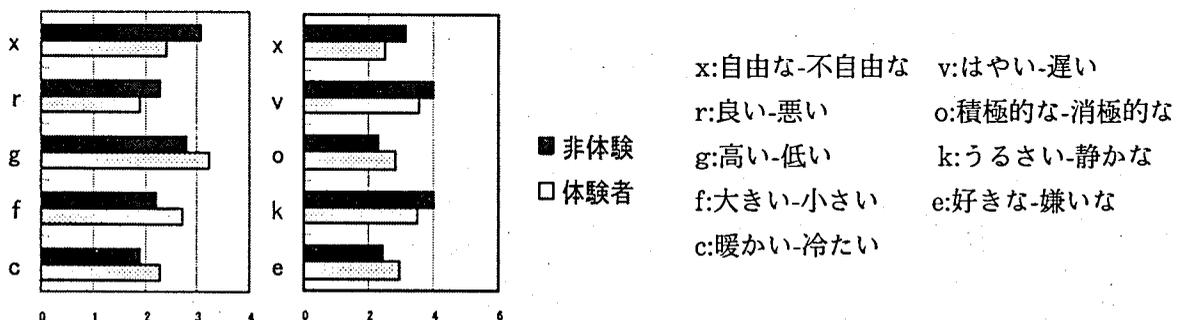


図3. 体験による農業のイメージ (都市：左と長野：右)

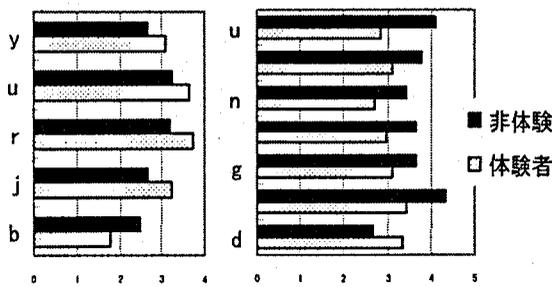
2) 過疎地域に対するイメージ

過疎地域に対するイメージでは、(単純な-複雑な)で都市(2.9)、長野(3.5)に差が見られた。また、農業体験者と非体験者とで差が見られた項目を図4に示す。

都市居住者の中では、農業体験者の方が過疎地域をきびしく悪く重いというイメージを強く持つ。また地方居住者では非体験者はきびしく悪くてしかも小さいというイメージを持つが、体験者はそうした悪いイメージは減少している。

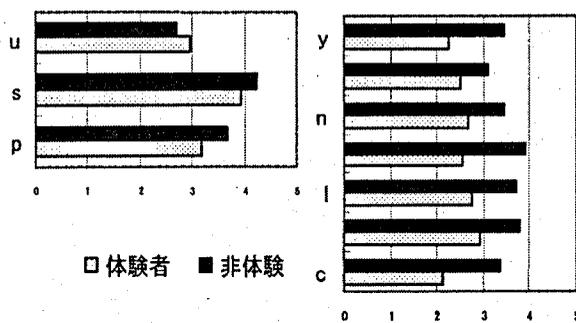
3) 高齢者に対するイメージ

高齢者に対するイメージは(重い-軽い)で都市(2.7)、長野(2.1)と、(大きい-小さい)で都市(3.6)、



y:深い-浅い n:やわらかい-かたい
u:やさしい-きびしい m:広い-狭い
r:良い-悪い g:高い-低い
j:単純-複雑 f:大きい-小さい
b:重い-軽い d:特別な-平凡な

図4. 体験による過疎地域のイメージ
(都市：左と長野：右)



u:やさしい-きびしい y:深い-浅い
s:はげしい-おだやかな n:やわらかい-かたい
p:強い-弱い m:広い-狭い
l:明るい-暗い
f:大きい-小さい
c:暖かい-冷たい

図5. 体験による高齢者のイメージ
(都市：左と長野：右)

長野(3.1)で差が見られた。また、農業体験者と非体験者とで差が見られた項目を図5に示す。

都市居住者の中では、農業非体験者の方が高齢者をやさしくおだやかで弱いというイメージを持つ。体験者は高齢者をやさしくもきびしい面もあり穏やかさが少し減ってくる。また地方居住者で非体験者は狭く暗いイメージと小さく冷たいイメージを持つが、体験者は深く広く暖かいイメージを持つ。

4-3.都市と地域との比較

1) 農業、過疎地域、高齢者に対するSD法による分析結果

それぞれのイメージを評価した24項目の形容詞対について因子分析を行った。因子負荷量の大きい因子を表6に示す。

表6 因子負荷量

I 農業に対するイメージ			
	美観因子		保守因子
美しい	0.64	古い	0.61
静かな	0.55	消極的な	0.54
		おだやかな	0.53
II 過疎地域に対するイメージ			
	明暗因子		静寂因子
貧しい	0.71	静かな	0.76
硬い	0.71	地味な	0.68
暗い	0.70	おだやかな	0.67
悪い	0.63		
きびしい	0.56		
狭い	0.55		
冷たい	0.51		
III 高齢者に対するイメージ			
	好感因子		活動因子
嫌いな	0.73	消極的な	0.75
悪い	0.71	弱い	0.60
硬い	0.66	地味な	0.56
狭い	0.66		
暗い	0.60		
不自由な	0.57		
冷たい	0.57		

また、①農業、②過疎地域、③高齢者に対するイメージを都市居住者と地域居住者の母平均の差は、過疎地域の「明暗因子」(貧しい・硬い・暗い・悪い・きびしい・狭い・冷たい)に関して有意差があっ

た。(表7)つまり都市居住者が過疎地域を暗いと感じる傾向が強いと言える。他の因子についても否定的・悲観的なイメージは都市居住者の方に多い傾向が窺える。

表7. 農業、過疎地域、高齢者に対する2群(長野と都市)の平均値の差

カテゴリ	長野 n	平均値	SD	都市 n	平均値	SD	t 値	p 値
F1 農業・美観	44	0.14	1.08	74	-0.08	0.71	1.36	0.09
F2 農業・保守	44	-0.08	0.86	73	0.07	0.87	0.91	0.18
F1 過疎・明暗	45	-0.21	1.12	74	0.11	0.78	1.78	0.04*
F2 過疎・静寂	45	0.01	0.93	74	-0.01	0.91	0.12	0.45
F1 高齢者・好感	45	-0.13	1.19	72	0.08	0.76	1.18	0.12
F2 高齢者・活動	45	-0.12	1.03	72	0.08	0.81	1.14	0.13

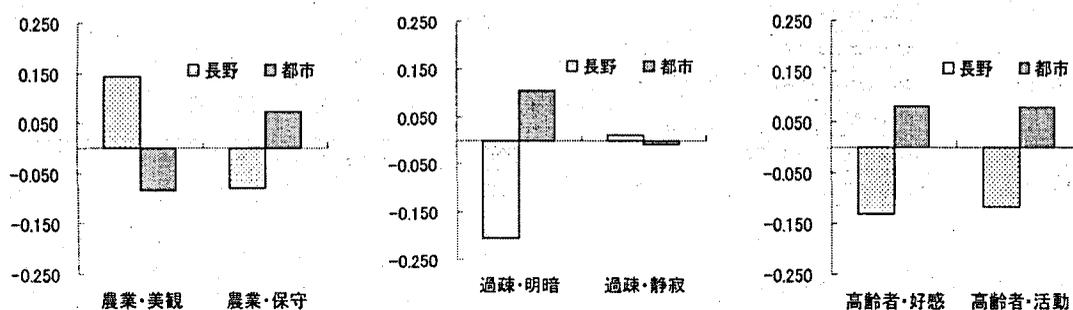


図6. 農業、過疎地域、高齢者に対する2群(長野と都市)の平均値の差

5. 考察

1) 農業体験

都市より地域(長野県)に居住する者の方が農業体験者の割合が多いのは一般的にも考えられることであるが、本研究でも長野県対象者48名の81.3%である39名が何らかの体験をしており、その回数も5回以上から多数と答える者が20名と多かった。一方都市での農業体験者は27名で割合としては非体験者36名を下回る42.9%であり、回数も4名を除いて5回未満となっている。特に農業体験として多いのが祖父母や親戚に農家を持つ場合で、長野県居住者の場合は距離的にも近い場所にそれらの農家があることが考えられ、手伝いや体験の回数も多くなったと思われる。

体験内容としては稲作では田植えや稲刈り、果樹栽培では収穫作業の手伝いが多く見られ、これらは短期間の内に人手を要する作業であることから、子供の手伝いも重要な労働力として含まれていることが分る。また野菜栽培では、芋掘りなどの子供が楽

しめそうな収穫作業が具体的に挙げられているが、他の野菜についても定植や収穫、草取りなど日常的な作業にも手伝いが期待されていたと考えられる。

2) 食材の調達

食材の調達に関しては、価格を重視する人が多いが、身近な生産者からの提供を受けにくい環境にある都市居住者にとっては「価格」の割合が68%と非常に大きくなり、産地から遠いということもあって「鮮度」を重視する人の割合も高くなる。それに比べて地域居住者は、農業体験の項でも示したが親や祖父母、親戚など身近な生産者からの農産物の提供を受けられる場合が多いと考えられ、その結果「価格」の割合が下がり、「安全性」を求めやすくなることを示している。

産地が近いほどフードマイルージ値が低下し、鮮度が良いものが得やすくなる傾向があり、出荷用ではない自家用作物が入手できるメリットもある。出荷用には見た目を良くしたり収穫量を上げるために

多少の農業を使う農家が多いが、自家用には農業をほとんど使わずに栽培するのが一般的であるので、そうした安全な野菜を入手する手段は、身近に生産者を持つ地域居住者の方が得やすい。

3) 食事の重視

都市居住者の方が全ての項目に渡って「食事」で重視する要求が高く、特に「栄養バランス」や「健康」の意識が高かったのは、対象者の平均年齢が都市部で5.4歳上であることにも関連していると思われるが、食事に関する意識が多様であることも影響する。また農業体験者と非体験者とでは食事に関して重要視する項目にあまり差が見られなかった。

4) 農業のイメージ

都市居住者の中では、農業体験者の方が農業を自由で良いというイメージを持ち、非体験者は大きく暖かいというイメージを持つ。また地方居住者では非体験者は遅く静かなイメージを持つが、体験者は自由であるがやや消極的で、好きでも嫌いでもないというイメージを持つ。体験者は時間などに囚われない農業に自由さを感じているとともに実際の農作業など具体的なイメージを持ちやすいのに対して、非体験者はメディアを通じた農村の雰囲気を想像して農業イメージを形成しているように考えられる。

5) 過疎地域のイメージ

都市居住者の中では、農業体験者の方が過疎地域に対してきびしく悪いイメージを強く持つ。これは、非体験者は過疎地域という知識はあっても、そこの生活など具体的なイメージを持ちにくいのにに対して、体験者は数少ない体験の際に都市生活との比較が生じ、不便な過疎地域に対してこのようなイメージを持ちやすくなると考えられる。また地方居住者では非体験者はきびしく悪くてしかも小さいというイメージを持つが、体験者は、過疎地域がきびしくも悪くもなく特殊なものではないと思う傾向になった。農業体験などを通して、祖父母や親戚などが住む過疎地域を実際に何度も見ている地域居住者にとって、過疎地域は特別な存在ではないと考えられる。

6) 高齢者のイメージ

都市居住者の中では、農業非体験者は高齢者をやさしくおだやかで弱いというイメージを持ち、体験者は高齢者をやさしくもあるがきびしい面もあるなど穏やかさが減少する。また地方居住者の中では、非体験者は暗く小さく冷たいイメージであるが、体験者は深く広く暖かいイメージを持つ。農業体験者は祖父母や親戚など的高齢者と接する機会が増えることから、力強く働く姿を見たり、高齢者の思慮の深さや広さを実感できる体験も多いと思われる。また高齢者比率の高い地域居住者は、身近に様々な高齢者を観察する機会が得やすいため、「いわゆる高齢者」というようなステレオタイプのイメージではなく、自身の体験を通して感じるイメージが形成されているように思われる。

6. まとめ

人間が生きていくうえで必要な「食材の調達」と「食事」は、様々な考えを伴って実施されているが、中でも価格や鮮度、健康維持、栄養バランスなどが大きな要素を占める。安全な食生活を送るためには鮮度や消費期限なども重要であり、食事がエネルギーの補給というような意味合いよりも、健康維持や栄養バランスを大事に考えるなど、毎日の食事を大事に考えている人が多いという結果が得られた。

ゆとりを感じながら暮らすスローライフの提唱や、ゆっくり食事をする事で食文化を守り食の楽しみを知ろうとするスローフードの広がりや、これまで完全に切り離されていた農業生産者や現場の状況を、消費者が身近に感じたいと思う行為の現れであり⁵⁾、本調査でも新鮮で安全な食材を希望しながら、調理方法や食事の雰囲気にこだわろうとする意識が都市居住者の中に高まっていることが示された。地域居住者の対象年齢が本調査では18~20歳に集中したことから、食事の意味合いが限定される傾向が強かったが、対象年齢が広がると食への関心が多様化する。

農作業体験の有無は、農業や過疎地域、高齢者へのイメージを形成する上で、影響が大きいと考えられた。都市居住者で農業体験のない人にとっては、映像や図書などで手に入れた知識をもとに想像する世界であるのに対して、体験者は実際の生活場面を

直接見て自分のイメージを持っており、総じて非体験者に比べてきびしいイメージが強い。一方、地域居住者にとっては、体験のない人の割合も少なく、多くの人は何回もの体験を通して自分の中でイメージを形成してきている。地域の非体験者が都市居住者の体験者と同様にきびしいイメージが強いのに対して、地域の体験者は自然とともに生活する農業や高齢者の姿から学ぶことで、きびしさもあるが強く暖かいイメージが形成されている。子供の頃の農作業体験は、農業や高齢者を身近なものに感じる機会を提供している一方で、自然を相手にする作業の厳しさも体験することとなる。特に夏の暑さの中での農作業は楽しさよりも辛さが先行するが、作物の成長や収穫の楽しみなど、他では味わえない体験が農業にはある。またそれを子供たちに語るができるのは、毎日を土とともに過ごしているゆえに説得力を備えた高齢者の風格である。

しかし自然の地形を最大限利用して造り、長年地域住民の食を支えてきた棚田も、作業効率の悪さと過疎化による生産者不足とで耕作放棄が広がり、いまや自然とともに暮らす農業スタイルは風前の灯である。生産効率を高めるために農業機械は大型化・高速化の進歩を続けてきたが⁶⁾、農業従事者の大半を占める高齢者にとっては、身体機能の衰えを補えるような小型で安全な機械が必要である⁷⁾とともに、若手の就農者が増加することが期待される。

対象者のなかで就職先として農業関連業種を考えている学生が、長野県対象者では47名中6名いたが、JAや市場などへの就職であり、自身が営農をしようと考えているものはいなかった。都市部の学生では0名だったことから、地域に居れば直接・間接を問わず就農機会があると言えるが、女子学生が大部分であったとはいえ農業を希望する学生がいなかったことは残念である。しかし、植物を育てたり農業体験をしてみたいという希望を持つ学生が少なくないことから、職業としてではなくても「援農」を期待できる人材として、興味や関心を維持できるようなシステム作りができると良いと考える。

なお、本調査とは別に、都市部の農大生に対して、同様の調査を実施している。進学の段階で農業関連業種を希望する学生が多い農大生が、実際の農業実習などを通して、農業や過疎地域、高齢者へのイメー

ジが変化するなど興味深い内容であるが、調査数がまだ少ないので、対象者を増やしていずれ公表する予定である。

謝 辞

本研究は平成20年度文部科学省科学研究費による。記して感謝の意を示す。

参考文献

- 1) 下平佳江・大橋信夫、過疎山村に住む独居高齢者の農業の実態と耕地のゆくえ、長野県短期大学紀要、No.50(71-89)、1995
- 2) 農林水産省、食料・農業・農村白書 平成19年版、2007
- 3) 農林水産省、フードマイレージ試算、2001
- 4) 農林水産省、平成15年度食料自給率レポート、2002
- 5) 星野紀代子、グレン・バーンズ、泥だらけのスローライフ、実業之日本社、2003
- 6) 社団法人 日本農業機械化協会創立50周年記念誌、50年のあゆみ、日本農業機械化協会、2008
- 7) 下平佳江・加藤麻樹、過疎山村の高齢者の草刈り作業に関する支援、長野県短期大学紀要、No.62(53-64)、2007